

特集にあたって

本特集は2004年12月11日、アピオ大阪で行われた、中国現代史研究会第五回ワークショップ「東アジア」における地域秩序と現代中国 帝国論の視点から」の成果をとりあげています。

冷戦後におけるグローバル化の進展は、政治・経済の両面にわたり新たな国際・地域秩序形成の動きを促しています。そのなかで中国も、アジア諸国とのFTAの締結や、北朝鮮をめぐる六カ国協議などを通じ、「東アジア」という地域的な枠組みの中での発言権と存在感を強めつつあります。

また、2001年9・11以降、特に顕著となったアメリカのいわゆる「帝国化」を契機に、国際・地域秩序のあり方を議論する枠組みとして「帝国」という概念が広く注目を集めてきています。歴史学の分野では、冷戦後における方法論の多様化のもとで、「帝国」的ありかたを主たる分析対象とし、そこから地域秩序に関するモデルを探ろうとする研究が行われるようになってきました。この2004年は歴史学、国際政治学においてこのような議論が積極的に展開された一年であったと言っても過言ではないでしょう。

このような問題関心のひろがりのなかで、1930年代アジア地域のビジネスネットワーク研究者の籠谷直人氏、華僑ネットワーク研究者の陳来幸氏、中国外交史研究者の川島真氏、中国をめぐる国際政治研究者の毛里和子氏という4名をパネラーにお願いし、フロアも交えたパネルディスカッション形式で議論を行いました。

おりしも、ワークショップ開催直前の11月には2005年「東アジア」サミット開催が決定されるなど、「東アジア」における地域秩序が新展開を見せた時期でもあり、「東アジア共同体」をめぐる、中国の位置づけ、アメリカの存在、主権国家の限界、複数の文化をつなぐ華僑のような存在が単一国籍しか認められないことの限界など、さまざまな意見が交わされました。詳細は本特集をご覧くださいとしまして、中国現代史研究会ならではの、歴史と現在が対話するディスカッションができたのではないかと考えています。

最後に、このような議論を可能にくださった、パネラー諸氏、フロアの皆様に感謝の意を表したいと思います。

(中国現代史研究会事務局)